

『信仰？それとも信念？』ヨハネ16:1-4

16:1 わたしがこれらのことを語ったのは、あなたがたがつまずくことのないためである。

16:2 人々はあなたがたを会堂から追い出すであろう。更にあなたがたを殺す者がみな、それによって自分たちは神に仕えているのだと思う時が来るであろう。

16:3 彼らがそのようなことをするのは、父をもわたしをも知らないからである。

16:4 わたしがあなたがたにこれらのことを言ったのは、彼らの時がきた場合、わたしが彼らについて言ったことを、思い起させるためである。これらのことを初めから言わなかったのは、わたしが一緒にいたからである。

●序論

今日のテーマに「信仰」と「信念」というように、似た言葉をあげています。

ここで、イエスさまにつながりつづけること、またその愛のうちにとどまりつづけることは、「信念」ではなく、すなわち「信仰」であり「信仰生活」です。

なぜなら、そこでは、まず神さまの恵みを頼る、そこでは神さまの愛が一番大切なものだからです。

一方で「信念」は、自分自身の意思と理想や主張、自分の考える正義が一番にきます。それを、自らの力をふるって実現することが大切になるのです。

「自分が正しいと信じることを貫く」、という強い表現にも使われます。

これは人として尊敬すべき大切なものを持っているとも言えるでしょう。

しかし、「信仰」とは違います。信仰は、まず神を求め、その御心を求めて、従うことを大切にします。そうして、そこで神の愛のうちにとどまるのです。そこで恵みが覆う世界の中に生きるのです。

●本論

I. つまずくことがないために

16:1 わたしがこれらのことを語ったのは、あなたがたがつまずくことのないためである。

「これらのこと」というのは、先週見た「憎まれる経験」についてです。

今日の最初の言葉英語では、… will not give up your faith. つまり「信仰を捨てないために」ということです。

ある人は言うでしょう。勝利さえできれば、そんな信仰を捨てることなどありません。

16:33…しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。

ここで誤解しないでください。この勝利は、だれかを論破することや、相手を打ち負かして言うことを聞かせる…というような人間的なものではありません。

あの十字架にこそ、憎しみにも罪にも、サタンにも勝利をおさめたイエスさまの愛の姿があるのだということです。

人がその姿を見るならば、最も凄惨な敗北の姿に見えるものでした。

けれどもその姿を一番近くで見上げた百人隊長は心から感動して、「まことに、この人は神の子であった」と証言するほどに、真実な愛に生き抜かれた姿であったということです。

わたしたちの勝利は、この十字架にこそあります。そこに表されたこの方の愛を勝利として受け取り、頼るのです。そうして、この方の恵み世界に覆われているからこそ、この方につながることは、確かな生き方だと言えるのです。

Ⅱ. 信念に対抗するのではない

迫害の状況下で、迫害する側は、特に自分の正義、「信念」をぶつけていました。一方で弟子たちもまた、最初はある意味「信念」に生きる者でしたが、イエスの復活と聖霊の働きを通して「信仰」に生きる者へと変えられたことを知ります。

① ペテロの変化（信念から信仰へ）については先週も申し上げました。

ペテロは「私は決してあなたを裏切りません」と誓い（マタイ26:33）、剣を取ってイエスを守ろうとしました（ヨハネ18:10）。この時の彼はまだ自分の正義、「信念に生きる」人でした。しかし、少し経つと恐れに負け、イエスを三度否認しました（マタイ26:69-75）。

しかし、そんな彼も、復活のイエスと出会い（ヨハネ21:15-19）、聖霊を受けた後に変えられました。自分の意志ではなく、神の導きに従い、大胆に福音を語る者となりました（使徒2章）。

彼は最終的にローマで殉教しますが、それは「自分の信念のために」ではなく、「主のために」生き、主のために死ぬという、「信仰」に基づくものでした。

② パウロ（サウロ）の変化（律法への信念からキリストへの信仰へ）

かつてサウロと呼ばれた彼の姿は、まさしく今日お読みした人そのものでした。

16:2 人々はあなたがたを会堂から追い出すであろう。更にあなたがたを殺す者がみな、それによって自分たちは神に仕えているのだと思う時が来るであろう。

サウロは、最初はユダヤ教の律法に従うことこそが正義だと信じ、キリスト者を迫害しました（使徒9:1-2）。彼は「信念に生きる者」でした。しかし、ダマスコ途上で復活のキリストと出会い、自らの価値観が覆われます（使徒9:3-6）。

それ以降のパウロは、「わたしにとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である。」（ピリピ1:21）と語り、もはや自分の信念ではなく、神の御心に生きる者となりました。

最終的にローマで殉教しますが、それは「信念に基づく死」ではなく、「キリストに従う信仰に基づく死」でした。

さて、わたしたちは果たして「信仰」に生きているのか、「信念」に生きているのか、

知らなければなりません。

- 1) 「信念に生きる」ことは尊いですが、それだけでは限界があります。
恐れや困難の前で揺らぐ…ペテロのように、自己の信念だけでは持ちこたえられないことがあるのです。
- 2) 一方で、「信仰に生きる」ならば、神の力に支えられるからです。
聖霊によって変えられた弟子たちがそうであったように、信仰は人間の意志や力ではなく、「神さまの力」「神さまの恵み」に支えられるものだからです。
- 3) 「信念」は自己実現のためのものですが、「信仰」は神の計画のためのものです。
弟子たちは、以前は自分の望みや成功を追い求める「信念に生きる」生き方をしていましたが、変えられて「信仰」により神の国のために生きるようになりました。

わたしたちも、自分自身に問いかけ、「信仰の人」となっていくために、まず神さまとの対話を重ねます。

…それが、

Ⅲ. イエスを思うことです

わたしがあなたがたにこれらのことを言ったのは、わたしが彼らについて言ったことを、思い起させるためである。(：4a)

自分は忘れやすい、そう思うことありませんか？自分の身に問題や悩みや恐れが起こった時、わたしたちはいとも簡単に、神さまに頼ることを忘れやすい…。

ああ、自分は今まで神さまに頼ってきたつもりが、どこかで自分の信念が優勢になっていた…と気づいたことはないでしょうか。

19世紀の後半、アメリカにひとりのクリスチャン、エリザ・ヒューイットという女性が、その長い闘病生活の中つづった聖歌の歌詞「歌いつつ歩まん」（「主にすがる我に悩みはなし」）です。

1. 主にすがる我に 悩みはなし 十字架のみもとに 荷を降ろせば
 2. 恐れは変わりて 祈りとなり 嘆きは変わりて 歌となりぬ
 3. 主はいと優しく 我と語り 乏しき時には 満たしたもう
 4. 主の御約束に 変わりはなし みもとに行くまで ささえたまわん
- ※ 歌いつつ歩まん ハレルヤ ハレルヤ 歌いつつ歩まん この世の旅路を

それまで、信仰に生きてきたつもりが、実は「信念」と自力に生きていた彼女は、信仰を見失い、神さまの恵みも見失いかけていた。その時に、ふしぎな信仰者との出会いで、思い起こすことができたのです。それがイエス・キリストの恵みです。

悩みや、信仰の挫折は、身近から、いやむしろ自分の内から起こってくる場合があります。そういう「時」が来た時、イエスさまの言葉を思い出すように、イエスさまは語ってくださっていることに耳を傾けてください。

わたしがあなたがたにこれらのことを言ったのは、わたしが彼らについて言ったことを、思い起させるためである。(：4a)

さいごに)

16:3 彼らがそのようなことをするのは、父をもわたしをも知らないからである。敵意や迫害の最大の理由を、イエスさまはこう語りました。

このことがどれほど大切か、のちにイエスさまはこう語ります。

ヨハネ17:8 永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがたがかわされたイエス・キリストとを知ることです。

じつは、この神とイエスさまを本当の意味で知ることを、この世の霊、サタンはさまざまに手を尽くして邪魔しにかかります。時には教会に混乱をもたらすこともあります。

だからこそ、ここで申し上げます。父なる神さまと、イエスさまを知る時間を、機会を、ぜひ大切にしてください。

私は皆さんがうきもきをもって主を求め聞いてくださるならば、聖霊さまが、人の思い以上の気づきと悟りを与えてくださると信じています。わたしは頼っているのです。そして信じているのです。それが神が用意してくださっている恵みの世界です。